

感覚的文章と色彩語との相関

浅井 邦彦*

A Interrelation between a Sensuous Style and the Words Expressing Colour

Kunihiko ASAI

Some seem much more sensuous than the others in literary works— for example, *Makuranosoushi* as a classical piece and Riichi Yokomitsu's as modern ones. The reason why so sensuous such literary works are as follows : it seems that embodied words and the words expressing colour often appear in those works.

In this paper, one will analyze how frequently the various kinds of word expressing colour appear in some of the Japanese literary works, so that one wants to reach a conclusion that the more the words expressing colour appear, the more sensuous the work become.

はじめに

文学作品を読んでもみると、感覚的なものとそうでないものがあることが感じられる。

たとえば、古典では「枕草子」、現代文では横光利一の作品が感覚的であると思われる。

感覚的であるのは、何に由来するかを、作品を読みながら考えてみると、具象語や色彩語の出現頻度に関係がありそうなのがわかった。当稿では、色彩語を的にしぼり、いくつかの作品について調査した。

1. 調査の前提

各作品のはじめから約 4000 字（3800 字～4200 字 文章のきりの良い区切りまで）に出て来る色彩語の個数を数える。

ここで言う色彩語とは、「白」、「黒」、「赤」などの文字通りの色彩語の他に、「桃（色）」、「銀（色）」等、作者が色をあらわすために使用した言葉を含んでいる。

また、「白馬」のように、複合語として、あきらかに色がわかるものも色彩語としてカウントしている。

しかし、「白井」のように、固有名詞の中の色彩語は対象としない。一方、「着かざった」とか

* 電気工学科

「華やか」のように、「色」を思い浮かべる言葉であっても、それ自身、色彩語でないものははぶいてある。

2. 各作品について

2-1 古典文学

明治より古い時代で、文学活動が最も盛んであり作品も比較的多く残っている平安時代の著作物を重点的に選んだ。

具体的には、作者の性格も作風も対照的である「枕草子」と「源氏物語」、その「源氏物語」を愛読してその影響を受けたと思われる菅原孝標の女の作である「更級日記」、作者不詳であるが、理知的な短編小説集である「堤中納言物語」の4作品を対象とした。

(1) 枕草子

作者は清少納言（966年＜？＞～1028年＜？＞）で成立は1000年前後と推定されている。

「春は曙。やうやうしろくなりゆく山際少しあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる」からはじめて約4000字のうちに、色彩語は「白」5、「青」3、「黒」、「赤」、「紫」各1の計11も出現しているがそれが三段までの約2000字のうちにことごとく出ている。ここは、自然描写が多いところである。この後は、人対応的な内容になっている。

また、「しろくなりゆく山際少しあかりて」のように色彩語（としてカウントしていない）ではないが、色彩語に近い表現が少なからずある。

枕草子が、1000年の時を経ても、文章に記述された風景が我々読者の眼前に浮かぶのは色彩語とそれに類似した語句を巧みに使っているからと言える。

(2) 源氏物語

作者は紫式部（975年＜？＞～1016年＜？＞）。1008年に「若紫の巻」が当時の貴族達に読まれていたのがわかっているので、全体の成立も11世紀初めと推定されるが、詳細は不明である。

「いずれの御時にか、女御、更衣、あまたさぶらひ給ひけるなかに、いと、やむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふ、ありけり」からの約4000字は、「桐壺の巻」の約3分の1にあたるが、ここには、色彩語が0である。

だからと言って、源氏物語、ひいては紫式部の作品が説明的過ぎるとは断言できないが、冒頭部分の比較では、枕草子と見事な対比をなしている。この「桐壺の巻」に、帝の歌として、「宮城野の露吹きむすぶ風の音に小萩がもとを思ひこそやれ」があるが、描写を借りながら、人の心をあらわしているのがわかる。

(3) 更級日記

菅原道真から五代目は菅原孝標になるが、その娘がこの日記の作者（1008年～1060年＜？＞）である。ただし実名はわかっていない。

この書は、1020年頃から40年間にわたって、日記として記されている。

「あづまぢの道のはてよりも、なほ奥つかたにおひ出でたる人、いかばかりかはあやしかりけ

むを、いかに思ひはじめける事にか、世の中に物語といふもののあんなるを……ひかる源氏のあるやうなどところどころ語るを聞くに、いとゆかしさまされど我が思ふままに、そらにいかでかおぼえ語らむ」が出だしである。

はじめからの約 4000 字の中に、色彩語は、「白」6、「紅」1、「むらさき」1、「こんじょう」の各 1 で合計 9 である。

作者は、源氏物語を愛読しながらも、この日記の色彩語の出現頻度が枕草子に匹敵するのは面白い。

「ひろ山なる処の砂子はるばると白きに、松原しげりて、月いみじうあかきに、風の音もいみじう心ばそし」(下総の旅)の文章などは、「色のついた」情景がよく表現されており、描写的、感覚的である。

(4) 堤中納言物語

10 編の短編物語を集めたものだが、「逢坂越えぬ言中納言」が 1055 年に小式部によって記述された以外は、作者、編集者、成立年代ともに不詳である。従って、この物語集を統一的には評価しにくい、わが国最初の短編集としての価値は少くない。

「蝶愛づる姫君の住み給ふ傍に、按察使の大納言の御女、心にくくなべてなさらぬさまに親たち侍き給ふ事限りなし」は「虫愛づる姫君」の出だしである。この短編小説全体でほぼ 4000 字になるが、色彩語は「白」と「黒」それぞれ 4 づつの 8 である。

毛虫、蝶、いなご、かたつむり、蛇など小動物が、続々と登場する。奇妙な物語である。平安時代の作と考える時に、その思いは一層、強くなる。「本地尋ねたるこそ、心ばへをかしけれ」が作者の言わんとしたところである。

感覚的、描写的なところもあるが、全体としては説明的である。色彩語の種類もかたよっている。

2-2 近代文学

明治以降の文学の作品は多くあるが、近代小説でありながら江戸時代風の書き方をとっている樋口一葉、即物的と観念的という意味で対照的作風の両端にある谷崎潤一郎と志賀直哉、それに前述した横光利一の作品を選んだ。

(1) たけくらべ

樋口一葉(1872 年～1896 年)の代表作で、成立は 1895 年である。

「廻れば大門の見返り柳いと長けれど、お歯ぐろ溝に燈火うつる三階の騒ぎも手に取る如く、明けくれなしの車の行来にはかり知られぬ全盛をうらなひて……」から、はじまって読点(。)が来るのは、第一章の終りである。約 4000 字になるキリのよいところは、第三章の最後である。この内の色彩語は、「白」4、「黒」3、「赤(あか)」3、「紫」2、「紺」1、「水(色)」1、「柿(色)」1 が各 1 の計 15 もある。

「田中の正太が赤筋入りの印半天、色白の首筋に、紺の腰かけ」のように、まさに、色とりど

りの色彩語によって、対象物が眼前に生き生きと浮かびあがって来る。

(2) 蓼喰ふ蟲

谷崎潤一郎(1886年～1965年)は、この作品を1929年に発表している。

「美佐子は今朝からときどき夫に「どうなさる？やっぱりいらっしゃる？」ときいてみるのだが、夫の例のどっちつかずなあいまいな返辞をするばかりだし彼女自身もそれならどうと云ふ心持もきまらないので、ついぐずぐずと昼過ぎになってしまった。」からはじまる約4000字の中に色彩語は一つも出て来ない。

「着飾った妻の化粧の匂ひ」とか「マニキュールの道具」とかのような用語によって、色彩語によらないで五感を刺激する効果をあげている。

また、谷崎潤一郎は会話をたくみに使用し、それが独特の世界を創りあげる上で有効になっている。更に会話だけでなく、個々の単語や文字の種類(漢字と仮名の配分など)にも十分、気を配っていることがよくわかる。そのような意味では、本稿の対象にしなかったが、武者小路実篤が無造作に、大らかに言葉を使用しているのとは対照的である。

色彩語が少ないのも意図的なものが感じられる。

(3) 城の崎にて

志賀直哉(1883年～1971年)の代表的な短編で、発表は1917年である。

「山の手線の電車に跳飛ばされて怪我をした、其後養生に、一人で但馬の城崎温泉に出掛けた」からはじまる約4000字の中に、色彩語は、「青」と「青白い」の各1つずつの計2つである。

小動物の死と自分の運命とを対比させているが、深刻なテーマにもかかわらず、ショートセンテンスの集合や平易な言葉づかいによって、読者は、作者の創り出す世界にたやすく入っていきける。

色彩語に関して、同じく短編小説ながら一種のユーモアがあり作風の異なる「小僧の神様」や長編小説「暗夜行路」ともにそれほど出現していない。

これは、評論家の青野季吉が言うように、志賀直哉は、はじめから完成された芸術家であるという主張と関係が深い。作者によっては、時を経る毎に、作風を変え、進化させていく場合もあるが、志賀直哉はそうではない。志賀直哉の作品群に共通している「色彩語の少なさ」は作者を特徴づける要素の一つである。

(4) 日輪

横光利一(1898年～1947年)は、この作品を1923年に発表している。

「乙女達の一団は水瓶を頭に載せて、小山の中腹にある泉の傍から、唄ひながら合歓木の林の中に隠れて行った」からはじまる約4000字の中に、「青」3、「白」2、「朱」、「赤」、「桃(色)」、「碧」、「緑(色)」、「銀(色)」が各1の計11である。

予想通り、色彩語は多用されている。

「森は数枚の柏の葉から月光を払い落してつぶやいた」という文章にみられるように、「日輪」はまさに、新感覚派の代表である。

新感覚派の作家というと、ノーベル文学賞を受賞した川端康成もいるので、その代表作「伊豆の踊り子」を眺めてみると、「密林を白く染めながら」、「瞳まで黄色く腐ったような」、「山々の姿が遠近を失って白く染まり、前の小川が見る見る黄色く濁って」のように、色彩語少なからず出現する。また、「間もなく雪に染まる峠」というように色彩語自身ではないが、色(この場合「白」)を眼前に思い浮かばせる文章がよく出てくる。

このように、新感覚派の(この呼称は、評論家千葉亀雄による)の作家は、その名の通り、感覚的な文章を創り出しているが、その大きな要素の一つとして、色彩語の巧みな使用があげられる。

3. 色彩語の出現数のまとめ

	作 品 名	個数	色 彩 語 の 種 類							
			白	黒	赤系*	黄系*	緑	青*	紫系*	他*
古典文学	枕 草 子	11	5	1	1			3	1	
	源 氏 物 語	0								
	更 級 日 記	9	6		1				2	
	堤 中 納 言 物 語	8	4	4						
	合 計	28	15	5	2			3	3	
近代文学	た け く ら べ	15	4	3	3	1	0	1	3	0
	蓼 喰 ふ 蟲	0								
	城 の 崎 に て	2						2		
	日 輪	11	2		3		1	4		1
	合 計	28	6	3	6	1	1	7	3	1
全 部 の 合 計		56	21	8	8	1	1	10	6	1

表 3-1

* 赤系には「朱」、「桃色」を含む

黄系には「柿色」を含む

青の中には「水色」を含む

紫系には、「青」と「紫」の間にある「紺」を含めている

他とあるのは「銀色」のことである。

表 3-1 に於て、色彩語の数は、偶然にも、古典文学、近代文学ともに 28 の同数になっている。しかし、色の種別はかなり異なる。古典では、「白」で過半数になり、これに、2 番目に多い「黒」を加えると、全体の 70%になる。物理的には、「白」や「黒」は色ではないかも知れないが、作者は色として使用している。また、「白」、「黒」は色どりよりも明暗を明示する効果がある。一方、近代文学は、まさに、色とりどりであり、天然色の世界が展開している。

この表によると、「源氏物語」と「蓼喰ふ蟲」がともに0になっていることに気がつく。谷崎潤一郎は、源氏物語の翻訳者としても有名であり、色彩語がともに0ということは、紫式部、谷崎潤一郎の両作家が志向している文学上の美の世界の共通性を定量的に示していると言える。

さて、本テーマである感覚的文章に色彩語がかなり相関をもっていることは、表3-1によってわかる。

参 考 文 献

- 1)「枕草子」 明治書院 金子元臣校註 昭和27年版
- 2)「源氏物語」 岩波書店 山岸徳平校註 平成7年版
- 3)「更級日記」 研数書院 田中文夫校註 昭和28年版
- 4)「堤中納言物語」 明治書院 久松潜一校註 昭和34年版
- 5)「たけくらべ」 河出書房 樋口一葉 昭和28年版
- 6)「蓼喰ふ蟲」 河出書房 谷崎潤一郎 昭和28年版
- 7)「城の崎にて」 河出書房 志賀直哉 昭和28年版
- 8)「日輪」 河出書房 横光利一 昭和28年版

5)～8)は、現代文豪名作全集に収録されている作品である。

(平成8年11月14日受理)